

日本史探究

学習プリント

高等学校 地理歴史科

高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)の
「日本史探究」A～Dの構成にそって

A

原始・古代の日本と東アジア

旧石器 縄文 弥生 古墳 飛鳥 奈良 平安

時代を通観する問い 中央集権的な国家は、なぜ、どのようにしてつくられたのか。

学習の初めに、いまの自分の予想（仮説）を書いておく。

A(1) 黎明期の日本列島と歴史的環境

■ 1 更新世の日本列島

(1) 大陸とつながっていたころ

【更新世】（約260万年前～約1万年前）は、氷期と間氷期がくり返された時代である。氷期には海面が今より百数十メートル低く、日本列島は大陸と地続きになった。そのため北からは【マンモス】やオオツノジカが、南からは【ナウマンゾウ】やヘラジカが渡ってきた。長野県の【野尻湖遺跡】からは、ナウマンゾウの化石と人間が使った道具が一緒に出土している。

※ 火山活動も活発で、関東平野には火山灰の積もった【関東ローム層】が形成された。

(2) 旧石器時代

人びとは【打製石器】を使い、土器をもたず、狩猟と採集をしながら移動する生活をしていた。群馬県の【岩宿遺跡】で、【相沢忠洋】が関東ローム層のなかから打製石器を発見したことにより、日本にも旧石器時代があったことが確かめられた（1946年）。

岩宿遺跡の発見は、それまでの日本史の見方をどう変えただろうか。

解答例 それまでは「日本の歴史は縄文土器の時代から始まる」と考えられていたが、土器をもたない時代が先にあったことが確かめられ、日本列島の歴史が数万年さかのぼることになった。

■ 2 縄文時代 —— 定住のはじまり

(1) 暮らしの道具と住まい

約1万年前に気候が温暖化すると、人びとの暮らしは大きく変わった。

- ① 【磨製石器】・【弓矢】・骨角器を使うようになった。
- ② 【縄文土器】をつくった。縄目の文様をもち、黒褐色で厚手。煮炊きと保存に使われた。
- ③ 【竪穴住居】に住み、水の便のよい台地に集落をつくった。
- ④ 【貝塚】（ごみ捨て場）が残る。東京都の【大森貝塚】はアメリカ人【モース】が発見した。
- ⑤ 【土偶】をつくり、【屈葬】や【抜歯】を行った。

※ 青森県の【三内丸山遺跡】では、最盛期に数百人が定住したとみられる大規模な集落が発掘された。クリの管理栽培や、遠隔地との交易のあともみつかっている。

(2) 定住が意味するもの

弓矢の発明で中小動物をとらえやすくなり、土器で木の実のあくを抜けるようになった。食料が安定して手に入るようになると、人びとは移動をやめ、同じ場所に住み続けるようになる。定住はやがて、ものを蓄えること、蓄えたものをめぐる差が生まれること、集落どうしの交換が広がることにつながっていく。

縄文時代には身分の差はほとんど見られない。それはなぜだろうか。

解答例 狩猟・採集・漁労が中心で、余るほどの食料を長期にわたって蓄えることが難しく、富の差が固定しなかったから。土地そのものを独占する必要もなかった。

■ 3 弥生時代 —— 稲作がもたらしたもの

(1) 大陸から伝わったもの

紀元前4世紀ごろ、大陸から【水稻耕作】と金属器が伝わった。

- ① 【弥生土器】…文様が少なく、赤褐色で薄手だが丈夫。用途に応じて使い分けた。
- ② 【青銅器】…【銅剣】・銅矛・銅戈・銅鏡。【銅鐸】は日本独自のもので、まつりの道具や首長のしるしに使われた。
- ③ 【鉄器】…武器や農具など、実用の道具として広まった。

※ 青銅器は祭りの道具、鉄器は実用の道具、という使い分けがおおよそ成り立つ。

(2) 稲作と社会の変化

福岡県【板付遺跡】、静岡県【登呂遺跡】、奈良県唐古・鍵遺跡などが知られる。
直播きし、木製農具（田下駄・鍬・鋤）で耕し、【石包丁】で【穂首刈り】をした。収穫した粳は【高床倉庫】に蓄えた。
稲作は、水路をひき、田を管理し、共同で作業する必要を生む。同時に、蓄えの多い者と少ない者の差＝【貧富の差】を生み、水と土地をめぐる【争い】を生んだ。
佐賀県の【吉野ヶ里遺跡】は、まわりに濠をめぐる大規模な【環濠集落】であり、物見やぐらのあとや、首を失った人骨も出土している。

環濠集落や、矢じりのささった人骨は、何を物語っているだろうか。

解答例 集落どうしが武力で争っていたことを物語る。稲作で蓄えが生まれた結果、その蓄えや水利・耕地をめぐって争いがおこり、集落は防御を固める必要が生じた。

探究 縄文時代と弥生時代を、①道具 ②住まいと集落 ③人と人との関係 の三点で比べ、「稲作の開始は画期といえるか」について、根拠をあげて書きなさい。

■ 4 小国の分立と邪馬台国

(1) 中国の歴史書に見える倭

この時期の日本列島には文字資料がない。そこで手がかりになるのが中国の歴史書である。

夫れ楽浪海中に倭人有り、分れて百余国と為る。歳時を以て来り献見すと云ふ。

建武中元二年、倭の奴国、奉貢朝賀す。……光武、賜ふに印綬を以てす。

倭人は帯方の東南大海の中に在り。……其の国、本亦男子を以て王と為す。……乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼と曰ふ。鬼道に事へ、能く衆を惑はす。

—— 上から『漢書』地理志／『後漢書』東夷伝／『魏志』倭人伝

①紀元前1世紀ごろ 倭は【100】余りの小国に分かれ、【楽浪郡】へ使者を送っていた（『漢書』地理志）。

②【57】年 倭の【奴国】の王が後漢の【光武帝】に使いを送り、【金印】を授かった（『後漢書』東夷伝）。江戸時代に福岡県【志賀島】で発見された金印には「【漢委奴国王】」と刻まれている。

③239年 【邪馬台国】の女王【卑弥呼】が魏に使いを送り、「【親魏倭王】」の称号と金印、銅鏡100枚を授かった（『魏志』倭人伝）。卑弥呼は約30の小国を従えていた。

※『魏志』倭人伝には、大人・下戸・生口という身分差や、租税・市の存在も記されている。

(2) 邪馬台国はどこにあったか

邪馬台国の位置については、いまだ決着がついていない。

【九州】説…邪馬台国は九州の地方政権にすぎず、ヤマト政権の成立は4世紀前後。

【畿内】説…邪馬台国は九州から畿内におよぶ広い政権で、ヤマト政権の前身。

同じ『魏志』倭人伝を読んで、なぜ正反対の結論が出てくるのだろうか。

解答例 倭人伝の記す方角と距離をそのまま進むと海上に出てしまうため、方角を誤りとみるか距離を誤りとみるかで到達点が変わるから。また、記述だけでは決められず、考古資料（銅鏡の分布や古墳の年代）をどう評価するかによっても結論が変わる。

発展 奈良県の【纏向遺跡】や【箸墓古墳】の年代測定が進み、近年は畿内説が有力とされることが多い。ただし決定的な文字資料は出ていない。